

教室の外へ—日常生活に役立つリスニング

齋木 郁乃

南カリフォルニアの人々は、ニュー Yorker に次いで話す速度が速いと言われている。そのスピードも一因なのか、1年と数ヶ月暮らす中で、相手の言っていることがうまく理解できなくて、意思疎通に支障を来す状況をたびたび経験したり見聞きしたりするうちに、教室で学ぶリスニングと、日常生活で必要とされるリスニングの質が、かなり異なっていることに気づかされた。本論では、英語学習者としての私自身の試行錯誤と、最近のリスニング教授法を基に、島根大学の英語教育カリキュラムの中で、日常生活に役立つリスニングを教える方法を考えてみたい。

1. 日常生活におけるリスニング

どのような方法論を用いようとも、EFLの最終的な目標は、英語によるコミュニケーションを可能にすることである。従って、教室内での活動は、教室の外へ出て実際に英語を使用する状況にできる限り近づけることが望ましい。実践的な練習を考案するためには、まず、日常生活で聴解力を要求されるさまざまな場面を把握しておく必要がある。

Penny Ur は、実際にコミュニケーションを図る場における、リスニングの種類を次のようなリストにまとめている。

- ラジオで、ニュース・天気予報・スポーツ中継・コマーシャル等を聞く。
- 家族や同僚と、仕事や最近の出来事について話し合う。
- 知人と、打ち合わせをしたり、情報交換をする。
- 電話で、打ち合わせをしたり、情報交換をする。
- パーティーなどの社交の場で、おしゃべりをする。
- （例えば、駅や空港などで）拡声器から流れる放送を聞く。
- 何かのやり方、どこかへの行き方といった、説明を受ける。
- 授業やセミナーに出席する。
- 面接をする・受ける。
- 映画・演劇・テレビ番組を見る。
- 講演・講義を聞く。
- 録音された、または放送された歌を聴く。
- （結婚式、授賞式、その他の儀式のような）あらたまった場に出席する。
- （例えば、医師から）専門的な助言をもらう。
- 口頭試問を受ける。 （2）

このリストをもとに、EFLにおけるリスニングと日常生活におけるリスニングを比較していく。

2. 能動的な活動としてのリスニング

上記のリストを一読してまず気づくのは、教室では受動的な作業として扱われがちなりスニングが、日常生活においてはいかに能動的な活動でありうるか、ということである。聴解が行われる多くの場面において、聞き手はただ聞いているのではなく、何らかの応答を要求されているのである。聴解とは、聞いて、理解し、その理解を発話によって示す、という一連の活動であるため、聞くことと話すことは切り離すことができない。

ところが、教室で行われるリスニング練習の大半は、学習者の応答を要求しない。例えば、ある程度の長さのスピーチを聞いて、その内容に関する質問に答える、という形式のリスニング問題は、TOEFLやTOEICなどの試験でもおなじみのものだが、このタイプのリスニング練習は、聴解力よりも記憶力に重点を置いている (Ur 4)。

教室でのリスニングを日常生活のリスニングに近づける第1歩は、会話文を活用することではないだろうか。短い会話のスキットにより、学習者は聞くことと話すことの密接な関係を体験することができる。特に初期の段階では、スキットの一言一句を理解したり記憶したりすることを求めるのではなく、言葉又は行動による短い応答を促すことに重きをおくべきである。また、注意すべきことは、リスニングの理解度を確認する手段として、母国語への翻訳をさせないことであろう。あらゆる発話の要素を母国語に置きかえようとする習慣は、より長く複雑な発話の理解を阻害する可能性がある (Rivers 200)。

John M. Murphy は、スピーキングとリスニングと発音を、一体化させて学ぶことを提案する。リスニングを「聞き手が動的な意味の構築に従事する、相互作用的な解釈の過程」と捉え、その過程の到達点は、「話し手が言ったことに対して創造的に反応すること」としている (56)。もちろん、高校までの英語教育で、話す練習をほとんどしたことがない大学1年生に対しては、スピーキングを強いることでストレスを与えないよう、細心の注意が必要である。それでもなお、初期の段階から、リスニングは応答を伴った動的な過程であることを強調することは、より実践的な聴解力を養うのに役立つと考える。

3. 冗語 (redundancy) と雑音 (noise)

大半のリスニング教材に欠けているのが、冗語 (redundancy) である。日常の発話においては、原稿を読み上げているのでない限り、出だしの言い間違い、繰り返し、言い直し、同語反復、“you know” “I mean” といった言いよどみが必ず含まれている。英語においては、50%が冗語だという説もあるほどである (Rivers 197)。例えば、教材英語を聞きなれた

耳で、ブリトニー・スピアーズのインタビューを聞いたとしたら、発言の大半が“you know”や“like”で占められていることに驚くかもしれない。

このような余分な言葉は、話し手が、話しながら考えをまとめて、本当に言いたいことを表現することを可能にするのみならず、聞き手にも、考える時間を与え、同じ情報を複数回違う言葉で聞くことにより、メッセージが理解しやすくなるという効果がある（Ur 7, Rivers 197-98）。従って、冗語の含まれない教材英語は、かえって聴解を難しくしていることになる。

雑音（noise）とは、外部の騒音というよりはむしろ、聞き手の注意散漫、話し手の発音や語法の間違い、また聞き手の言語に関する知識や経験の不足のために発生する、「意味のない音」のことである（Ur 7-8）。外国語を聞くときに生じる雑音の大半は、聞き手がその言語の音や単語のつながりに慣れていないことから生じる。当然のことなのだが、知らない語句は雑音として認識され、聴き取れない。

母国語を聞いているときにも、雑音は発生するが、聞き手はその雑音に左右されることなくメッセージを受け取ることができる。外国語学習者が雑音にうまく対応できないのは、心理的な要因による。一言一句全てを聴き取らなければならない、という強迫観念が働いているのである（Ur 14）。レベルに合ったリスニングの練習問題をこなしている段階で、全ての単語を聞き取れるという状態に慣れてしまうため、100%聴き取れなくても十分にコミュニケーションは図れるということがなかなか理解できない。上級者が陥りがちなのは、全てを聴き取ろうとするあまりに、細部に気を取られて重要な情報を取捨選択してすくい取ることができない状態である。日本の大学生は、精読には慣れているが多読には慣れておらず、知らない単語や語法に行き当たると、それを無視して読み進むことができない。同様に、リスニングにおいても、雑音を当たり前のものとして、主要なメッセージを聴き取るトレーニングが不可欠だろう。

4. 予測（predicting）と文化的コンテキスト

レストランで“Soup or salad?”と聞かれて、“Super salad?”と勘違いして“Yes.”と答えた、というのはよく知られた笑い話だが、このような失敗は一度すれば二度と繰り返すことはない。なぜなら、二度目からは何を聞かれるかを予測できるからだ。

スターバックスでホットコーヒーを注文すると、“Room for cream?”と聞かれる。“Do you need room for cream?”と文法的に完全な文で聞かれたとしても、また、「クリームのための余地が必要か？」と文法的に正しく訳せたとしても、初めて注文する人は本当の意味が理解できないかもしれない。“Room for cream?”のたった3単語のうちに、「スターバックスではコーヒーを紙コップにあふれそうなほどぎりぎりまで注ぎ入れるので、クリームを入れたい時は、コーヒーを少なめに入れてもらう必要がある」というコンテキストが

含まれていて、その文脈をあらかじめ知っていない限り、単語が聴き取れても文法的な意味がわかって、文脈上の本当の意味を理解することはできない。

言葉によるコミュニケーションは、話し手と聞き手の間に共有された「文化的なスクリプト（ある状況についてあらかじめ持っている知識）」を前提として、初めて成り立つ（Richards 22-23）。国際共通語としての英語、コミュニケーションの道具としての英語を学ぶことを目的とするにしても、言語はその言葉話す人々の文化や慣習に深く根ざしているため、英語圏の人々（アメリカに限る必要はない）の生活や文化についての知識を教材の中に盛り込むことが大切であろうし、そのことにより学習者の知的好奇心を高めることにもなる。

5. ナチュラル・スピードと多様なアクセント

リスニング教材の英語は、故意にゆっくりはっきり発音されている場合が多い。あまりにもスピードを落として発音すると、自然なイントネーションや会話特有の短縮された音が失われてしまう。初級の学習者に対してでも、教材は必ずナチュラル・スピードで話されたものを使うべきである。この場合の「自然な」速度とは、英語の母語話者の日常会話のスピードという意味ではなく（初心者には速すぎて聴き取れない）、話し言葉で通常起こり得る、単語のグループ分け、母音の省略、リエゾン、子音の同化、そして自然なリズムとイントネーションが保たれる程度のスピードのことである（Rivers 201）。

また、EFLの教室では、ほとんどの場合英語の母語話者の話す英語を教材として使用している。しかし実際には、母語話者の中にも多様な話し方があり、非母語話者同士で英語で話す場合はなおさら、母国語の影響により様々に異なるアクセントの英語を聴き取る必要がある。従って、教材として、いつも同じ話者の英語を聞かせるよりも、異なるアクセントで話す複数の話者の英語を用いた方がよい。

6. テストするのではなく、教える

外国語を聴き取る作業は、集中力を要求され、長時間続けば疲労し、理解度も落ちる（Ur 19-20）。その上、リスニングの練習は、聴き取れたかどうかを試すテストの要素が強いものが多く、学習者の心理的負担はますます大きくなる。リスニングのストレスを少しでも軽減するためには、学習者に十分な予備知識を与えておく、つまり“pre-listening activities”（リスニング前の準備運動）を充実させることが大切である（Richards 233-34）。主題についての意見交換や、簡単な質疑応答、背景知識を含んだ簡単な読み物などを用いて、学習者の「文化的スクリプト」を活性化させ、リスニングの目的を明確にすることで、テストの要素は弱まり、学習者にストレスではなく達成感を与える結果となるだろう。

参考文献

- Murphy, John M. “Oral Communication in TESOL: Integrating Speaking, Listening, and Pronunciation.” *TESOL Quarterly* 25.1 (1991): 51-75.
- Richards, Jack C. “Listening Comprehension: Approach, Design, Procedure.” *TESOL Quarterly* 17.2 (1983): 219-40.
- Rivers, Wilga M. “Listening Comprehension.” *The Modern Language Journal* 50.4 (1966): 196- 204.
- Ur, Penny. *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.